03. Love Nest

いつものようにアラームが鳴る前に目が覚める。ただし、いつもと違って目の前に清瀬の顔があって腕の中にはその身体があった。一瞬びっくりして、それから甘い喜びが溢れてきて走の頬を緩ませる。

昨日、ここに越してきた。

念願の清瀬とのふたり暮らしだ。漸くふたりで生きていく為の場所を手に入れた。もう「また来ます」と口にして帰り道に寂しい気分になることもない。今度は走が清瀬に頂点を見せると約束してから三年が経った。三年、清瀬を待たせた。これでやっとスタート地点に立つことが出来たような気がする。

清瀬を起こさぬよう、走は左手をそうっと伸ばして枕元の腕時計のアラームを切った。安らかな寝顔を見詰めながら、それにしてもハイジさんは寝姿も美人だなと改めて感心する。どこかの双子のように口を開けてがーがーいびきをかいたり手足を使って卍マークを描いたりしない。薄く開いた唇はすうすうと穏やかな呼吸を繰り返し走の右手を挟むようにしている両手は胸の前に揃えて置いてある。やわらかな髪は乱れていてもどこか品があり、却ってそのくしゃくしゃ具合が可愛らしい。ジョッグに行かなくてはならないのに目を逸らせない。